

3. 代表海域(区)別帯状構造及び海域生物出現状況の特徴

(1) 石狩湾(石狩海域)

- 調査地区 16.9 カブト岩 内湾一開放海岸一磯浜

本調査地区の帯状構造は、上位帯から下位帯へ、イワフジツボ群→タマキビ、イワフジツボ群→ムラサキインコ、エゾヒトエグサ、ウスバアオノリ群→ムラサキインコ、ピリヒバ群となつてゐる。

また、生物出現状況は、クロタマキビ、コウダカチャイロタマキビ、エゾヒトエグサなど寒帶性生物と、ワカメなどの温帶性生物などもみられる。

以上のことから、暖流と寒流の両方の影響を受けていることがわかる。また、本調査地区は、内湾域であるにもかかわらず、内湾種の著しい群がみられなかつたことは、石狩湾が開口性湾であり外海水の流入が多いといふ特性のためと考えられる。

(2) 室蘭海域(胆振海域)

- 調査地区 16.6 チャラツナイ 内湾一開放海岸一磯浜

本調査地区の帯状構造は、上位帯から下位帯へ、タマキビ、クロタマキビ群→イワフジツボ、チシマフジツボ、ピリヒバ群→フジマツモ、スガモ群→ミツイシコンブ、エゾツノマタ群となつてゐる。

海域生物出現状況は、寒帶性生物(クロタマキビ、チシマフジツボ、フジマツモ、ミツイシコンブ)と、温帶性生物(ワカメ)がみられる。このことは、本調査地区が、寒流、暖流の影響を受けていることを示唆している。

(3) 陸奥湾

- 調査地区 16.1 2 中野沢海岸 内湾一開放海岸一砂泥浜

本調査地区の帯状構造は、上位帯から下位帯へ、ハマダンゴムシ群

→コタマガイ、ヒメスナホリムシとなっており不明瞭である。

(4) 秋田海域

- 調査地区 17 矢鼻 外海一保護海岸一磯浜

本調査地区における帶状構造は、上位帯から下位帯へ、アラレタマキビ群→モクズヨコエビ、ツヤナシオグサ、ベッコウザラ群→イソモク群となっている。なお、帶状構造は明瞭でない。これは、日本海側全域において共通することで、潮位差が小さいためによるものと思われる。

海域生物出現状況では、ホンダワラ類など、温帯性生物がみられ、対馬暖流による影響があると考えられる。

(5) 富山湾

- 調査地区 36 潱浦海岸 内湾一包囲海岸一転石浜

本海域は、潮位差が小さいため、富山県の報告書は、潮位帯を潮間帯、漸深帯に2分割している。そのため、帶状構造は不明瞭である。

潮間帯付近は、チビカニモリ、モツボ類、コオロギガイが優占しており、以下漸深帯では、温帯性ホンダワラ類の藻場を形成している。

モツボ類、コオロギガイ、温帯性ホンダワラ類など温帯性生物がみられ、本調査地区は温帯域にあるといえる。

- 調査地区 37 岩瀬海岸 内湾一開放海岸一砂泥浜

本調査地区は、潮間帯にヒメスナホリムシ、ヒメハマトビムシ S.P.、サシバゴカイ、ヒメカノコアサリ、漸深帯に、*Pseudopolydora Kempfi*、ヒメカノコアサ、マテガイなどが優占している。

本調査地区で注目すべきことは、*Pseudopolydora Kempfi* 群

である。同属の *Pseudopolydora Paucibranchia* は、有機汚染域に多い種とされており、今後、汚染状況の指標種として本種に着目し継続的な調査が望まれる。

(6) 若狭湾

- 調査地区 1650 小田宿野浜 内湾一包囲海岸一砂泥浜
- " 1651 由良浜 内湾一開放海岸一砂泥浜

両調査地区は、地理的に近く、両調査地区とも帶状構造は不明瞭で、全潮位帯において *Lycastopsis augeneri* が単独で優占している。一般に多毛類は、汚染が進行すると、優占度の増加が認められるが、現状のデータだけで断言することはできない。今後、本種に着目し継続的な調査が望まれる。

(7) 鳥取海域

- 調査地区 1659 小鴨ヶ磯 外海一保護海岸一磯浜

本調査地区における帶状構造は、上位帯から下位帯へアラレタマキビ群→イソムラサキ、ピリヒバ、ユナ群→ムラサキイガイ、ピリヒバ群→イソムラサキ、ピリヒバ、ユナ、シダモク、マメダワラ群となっている。帶状構造は、不明瞭である。これは潮位差が小さいためと思われる。

(8) 博多湾

- 調査地区 1681 今津 内湾一保護海岸一砂泥

本調査地区における帶状構造は、上位帯から下位帯へ、ヒメハマトビムシ群→アサリ群→アサリ、ウミトラノオ、アナアオサ群となっている。アナアオサが優占していることは、海水の富栄養化傾向を示唆していると思われる。

また、アサリ、イソゴカイ、ギボシイソメの出現は、内湾性の特徴を示しているものと思われる。

(9) 三陸海岸

- 調査地区 1614 越喜来湾崎浜 内湾一保護海岸一磯浜

本調査地区の帶状構造は、上位帯から下位帯へ、イワフジツボ群→タマキビ、イワフジツボ群→ムラサキインコ、エビヒトエグサ、ウスバアオノリ群→ムラサキインコ、ピリヒバ群となっている。

海域生物出現状況から、寒帶性生物（エゾヒトエグサ、エゾノネジモク）と温帶性生物（ヒジキ）が出現している。このことは、親潮寒流、黒潮暖流など、双方の影響を示唆するものである。

(10) 仙台湾

- 調査地区 1615 メカル崎 内湾一保護海岸一磯浜

本調査地区の帶状構造は、上位帯から下位帯へ、アラレタマキビ群→コガモガイ、イワフジツボ群→イワフジツボ、コガモガイ、ネバリモ群→マツカゼ、ツブランコムシ群となっている。

コガモガイは、内湾性の種で本調査地区における特徴を示す。また、マツカゼは、本州中部以南線下に分布していると、吉良（1956）に記載されており、本種が、本調査地区に出現したことにより、温帶的傾向にあると考えられる。

(11) 東京湾

- 調査地区 1630 三枚州 内湾一保護海岸一砂泥浜

本調査地区の帶状構造は、全く不明瞭で潮上帯から高潮帯は無生物帯である。中潮帯から低潮帯にかけて、シオフキガイ、アサリ、多毛類と汚染に強い内湾性の種が多く、本調査地区付近の海域が、汚染されていることを示唆するものである。

- 調査地区 1632 旗山崎 内湾一開放海岸一磯浜、転石浜

本調査地区の帶状構造は、上位帯から下位帯へ、タマキビ群→イワ

フジツボ、ボタンアオサ群→ムラサキイガイ、アカフジツボ群→クダ
オソコエビ、オキツノリ、フダラク群となっている。

アカフジツボ、クダオソコエビは、弱内湾性の指標種で、本調査地
区が湾口部に位置し、外海水の流入があることを示唆している。また、
生物相は、温帯性の種が多くみられる。なお、ボタンアオサ群は、海
水の富栄養化傾向を示しているかもしれない。今後の継続的な調査が
望まれる。

(12) 相模湾

- 163 3 毛沙門 内湾一保護海岸一磯浜、転石

本調査地区における帶状構造は、上位帶から下位帶へ、ウミニナ群
→イソニナ、カギメリタヨコエビ、アラムシロガイ、ボタンアオサ群
ピリヒバ群→カギメリタヨコエビ、ピリヒバ、ヒジキ群となっている。

生物相をみると、温帯性生物（ヒジキ、ワカメ、アラメ）が多く生
息している。このことは、本調査地区付近の海域が温帯域にあること
を示唆している。また、ボタンアオが群落を形成しているが、海水の
富栄養化傾向を示している可能性があり、今後の調査が望まれる。

(13) 遠州灘

- 調査地区 164 3 御前崎海岸 外海一開放海岸一磯浜

本調査地区は、潮上帶から高潮帶にかけて砂浜で、わずかにヒメス
ナホリムシが確認されるだけである。以下の潮位帶は、磯浜でタマキ
ビ群→ツブラホコムシ群、ボタンアオサ、ヨロイイソギンチャク群と
いう帶状構造になっている。

また、ケヤリの生息がみられるが、本種は、熱帶的傾向があり、黒
潮暖流による影響と思われる。なお、ボタンアオサ群が多くみられる
が、海水の富栄養化傾向を示唆しているのかもしれない。今後の調査

が望まれる。

(14) 伊勢湾

- 調査地区 164 5 小佐海岸 内湾一開放海岸一磯浜

本調査地区は、湾の中部に位置している。帯状構造は、上位帯から下位帯へ、アラレタマキビ、イワフジツボ群→イワフジツボ、ヨロイイソギンチャク、クロイソカイメン、イシゲ群→アナアオサ、ヒジキ群となっている。

ヒジキ、イシゲは、汚染に弱い種で優占種として出現している。このことは、本調査地区付近の海域に、外海水の流入が多いことを示している。しかし、アナアオサ群の出現は、富栄養化傾向を示唆しているかもしれない、今後の継続的な調査が望まれる。

- 調査地区 164 6 竹島海岸 内湾一保護海岸一砂泥浜

本調査地区は、湾奥に位置している。帯状構造は明瞭でなく、高潮帯から低潮帯にかけてアナアオサ群が発生しており、低潮帯にホトトギスガイ群がみられる。

アナアオサ群の発達が著しいことは、海水の富栄養化傾向にあることを示唆しているように思われる。

(15)瀬戸内海(区)

- 調査地区 165 2 長崎 内湾一開放海岸一転石浜

本調査地区は、大阪湾内にある。帯状構造は、上位帯から下位帯へ、タマキビ群→イワフジツボ群→ヨコエビ類、クビレクロズケガイ、ヒライソガニ群→ニッポンモバヨコエビ、アナアオサ、ナガアオサ群となっている。

アオサ類が、低潮帯付近に卓越しているが、富栄養化傾向を示唆しているのではないかと思われる。

○ 調査地区 1655 コブトコロ 内湾一開放海岸一磯浜

本調査地区は、播磨灘にある。帯状構造は、上位帯から下位帯へアラレタマキビ、タマキビ、カメノテ群→クログチ、イワフジツボ、アナアオサ群→イボニシ、タテジマイソギンチャク、ヤッコカンザシ、アナアオサ群→ヤッコカンザシ、アナアオサ群となっている。

本調査地区では、アナアオサ、ヤッコカンザシ群が発達しており、海水の富栄養化傾向を示唆していると思われる。

○ 調査地区 1674 浦生 内湾一開放海岸一砂泥浜

本調査地区は、備讃瀬戸海域にある。帯状構造は、上位帯から下位帯へ、アラレタマキビ、タマキビ群→イワフジツボ群→イワフジツボ、ムラサキイガイ群→ムラサキイガイ、アナアオサ、ウスバアオノリ群となっている。

ムラサキイガイ、アナアオサ群が発達していることは、海水の富栄養化傾向を示唆しているものと思われる。

○ 調査地区 1668 仙酔島大浦 内湾一開放海岸一砂泥浜

本調査地区は、備後灘にある。帯状構造は、上位帯から下位帯へ、ハマダンゴムシ群→ヒメスナホリムシ群→アナアオサ群となっている。アナアオサ群が特に発達しており、海水の富栄養化傾向を示唆しているものと思われる。

○ 調査地区 1676 大串 内湾一保護海岸一転石、砂泥浜

本調査地区は、伊予灘にある。帯状構造は、タマキビ群→フツウゴカイ、ヒトエグサ群→クロホシムシ群となっている。

生物相をみると、多毛類が非常に卓越しており、海水の富栄養化傾向を示しているものと考えられる。

以上、瀬戸内海におけるいづれの調査地区でも、アオサ類、多毛類の

群落、群集が多くみられる。これにより、瀬戸内海全域において、海水の富栄養化が進行していると考えられる。また、温帶性、内湾性生物が多くみられ、瀬戸内海海域における生物相の特徴をあらわしている。

(16) 土佐湾

- 調査地区 16.7.8 浦の内湾 内湾一包囲海岸一磯浜

本調査地区は、ほぼ湾奥に位置している。帯状構造は、上位帯から下位帯へ、イワフジツボ群→マガキ、ヒトエグサ群→タテジマフジツボ、ウズマキゴカ SP. 群→キイロスナインギンチャク、サンカクフジツボ、マメダワラ群となっている。

生物出現状況からみると、シロスジフジツボ、タテジマフジツボは、強内湾性で本調査地区の特徴を示す生物である。

- 調査地区 16.7.9 王無浜 内湾一開放海岸一磯浜

本調査地区は、ほぼ湾口に位置している。帯状構造は、上位帯から下位帯へ、アラレタマキビ、イワフジツボ群→クロフジツボ群→クジャクガイ群→イソモク、ネジモク、クロメ群となっている。

生物相をみると、熱帶、温帶生物（クジャクガイ、イソモク、クロメ）が多く確認される。これは、黒潮暖流の影響によるものと考えられる。

(17) 有明海

- 調査地区 16.8.2 大授搦 内湾一開放海岸一砂泥浜

本調査地区的帯状構造は、不明瞭である。特に優占している種は、アゲマキガイ、ゴマフダマガイ、テリザクラガイと思われるが、はつきりした群集はみられない。

なお、今回採集されなかつたが、ムツゴロウ、ワラスボなどもみられ、両種とも有明海における特産種として有名である。

(18) 鹿児島湾

- 調査地区 16.9.1 大正溶岸 内湾一保護海岸一磯浜

本調査地は、潮上帯が無生物帯である。帯状構造は上位帯から下位帯へ、コビトウラウズ、クログチガイ、イワフジツボ群、アナアオサ、コケモドキ群→ヒバリガイモドキ、シロスジフジツボ、アナアオサ群となっている。

なお、中潮帯から低潮帯にかけてアナアオサが多く、海水の富栄養化を示唆しているものと思われる。また、棘皮動物（ムラサキウニ、ナガウニ）が、転石の間に多くみられる。

(19) 沖縄海域（沖縄島海域）

- 調査地区 16.9.3 唐泊 外海一保護海岸一磯浜

本調査地区的帯状構造は、上位帯から下位帯へ、イボタマキビ群→コガモガイ群→ウミトラノオ、アナアオサ、アオノリ SP. 群→造礁サンゴ、ナガウニ群となっている。

生物相をみると、熱帯性生物（コンペイトウガイ、サンゴ類、イボタマキビ etc）が多く、本土における生物相と異なる様相を呈している。

